

そして僕は
大人になった



人刀

そして僕は大人になった

その本のことを知ったのは、高校を卒業して半年後の夏の終わり、「入学試験」という名のおつにすました制度の正体が熾烈な弱肉強食のつめ込み負荷耐性競争に過ぎないことに遅まきながらやっと気づき、それまで持っていた勉強に対する自信もプライドも、その実裏付けのないものであったことを、連日繰り返される模試や授業や同窓との話の中で嫌というほど味あわせられ、完全に瓦解し、うろうろおたおた、先行きに不安を感じ焦燥感でいっぱいになりつつも、目の前のことに遮二無二集中するだけの貪欲さは自分の内側のどこを探しても見つけることができないという、まるで太宰治のトカトントンのように妙に白けた状態になりながら通っていた予備校の食堂で、偶然手にした誰かの置き忘れの新聞の、書評欄の中であった。

初めの印象は随分淡白だったと思う。

読み終わった新聞は、持ち主が取りに来るとも限らないとばかりに元通りの場所に戻したし、直ちに書店に向かったわけでもない。しかし、何かなまめかしいものを奥に隠しているような書評の内容がひどく記憶に強く残っていたようで、後日参考書を探しに行った際の書店で思い出し、書棚を探すとたまたますぐ見つかったため、まあものは試しと、節約中の小遣いの中から興味と買った場合の残金とを天秤にかけ、やや下がり気味の残金の秤に片目をつぶって購入して帰った。

そしてその日のうちに読了した。

夢中だった。

目からぼろぼろざばざば、うることかいろんなものが文字通り滝のように流れていくように感じた。

時間を忘れて没頭したのはいつ以来だろうかと思った。そしてそのことを幸せに思った。

自分はなんてちっぽけで何ひとつ知らない存在なんだろうと心の底から思い知らされた。

その本のタイトルを、「知的な痴的な教養講座」という。

そして、その著者を、開高健氏という。

サントリー（旧壽屋）でキャッチコピーを手がけていたが、「裸の王様」で芥川賞を受賞してから退職し、専業作家として活躍された。朝日新聞臨時特派員としてベトナム戦争真っ最中の頃、米軍に従軍し、生死の境を目の当たりにしつつ生き延び作品にしている。また、釣師としても有名で、日本はもちろん、世界中のあらゆる場所に出かけ珍魚怪魚を釣り上げている。1989年、食道腫瘍に肺炎を併発し、死去。享年58歳。

既にお亡くなりになっている方だと知ったのは随分後になってからのように思う。
悔しいと思った。この先新しく生み出される作品を、この著者の今の文章を、読むことがかなわないなんて。

本の内容自体は、肩肘張らずに読めるエッセイ集である。

しかし、その文章の密度と博識さ、経験の重さは、今読み直してみても夢中になるだけの深度と広がりを持っている。

なにより、難しいことを簡単（そう）に書くことの難しさは、年齢を重ねるほどに実感するところである。

関西人特有のユーモアや諧謔も小憎らしいほどにつぼを突く。

この本と出会うことで、僕は「本当の大人」の世界を知った。

そして今、私は、あの頃知った「本当の大人」になれていると言えるだろうか。

はなはだ自信はないが、少なくともこの本を知らずに生きてきた自分よりは、「本当の大人」に近い人生を生きてきて今があると思いたい。

『常識を守るためには、非常識な行動に出なければならないこともある。常識と非常識のけじめはもうろうとしているが、苛烈で恐ろしいものを背景にしているし、すくなくともその足もとは流血にまみれているんだ、と知るべきであるし、感ずるべきである。』（知的な痴的な教養講座 開高健 第26章 コモン・センスより）